

N2011210

地域住民はスポーツツーリズムの効果を認知しているのか？

－社会文化的効果モデルの検証及び性別による比較－
○山口志郎¹, 秋吉遼子², 山口泰雄³ (¹流通科学大学,
²東京国際大学, ³神戸大学)

【目的】本研究は、沖縄県名護市におけるスポーツツーリズムの効果を明らかにし、スポーツツーリズム・サポートに影響を及ぼす要因を明らかにすることを目的とする。また、Chen (2000) によると、スポーツツーリズムの効果には性差があることが明らかにされていることから、本研究では、性別による類似・相違点についても比較検討する。【方法】本研究の調査対象は、沖縄県名護市在住の20歳以上の成人1,000名を住民基本台帳から系統抽出法を用いて抽出し、2011年10月に郵送法による質問紙調査を実施した。回収数は、325票 (32.5%), 有効回答数は320票 (32.0%) であり、調査項目はサンプルの属性、スポーツツーリズムの効果及サポートであった。【結果】性別による仮説モデルの検証を行うため、多母集団同時分析を行った。その結果、男性においては、「社会的効果 ($\beta = .33$, $p < .001$)」、「環境的効果 ($\beta = .40$, $p < .001$)」、及び「否定的効果 ($\beta = .26$, $p < .001$)」が、スポーツツーリズム・サポートに影響を及ぼすことが明らかとなつた。一方、女性に関しては、「社会的効果 ($\beta = .29$, $p < .001$)」、「環境的効果 ($\beta = .59$, $p < .001$)」、及び「否定的効果 ($\beta = .29$, $p < .001$)」が、スポーツツーリズム・サポートに正の影響を及ぼすことが確認された。しかしながら、「経済的効果 ($\beta = -.32$, $p < .001$)」については、スポーツツーリズム・サポートに対し負の影響を示すことが明らかとなった。

キーワード：スポーツツーリズム、社会文化的効果モデル、地域住民、性差

N2021201

ドラウタビリティ・プログラムの性差における有効性の検証

○安光達雄¹, 野川春夫² (¹NPO法人 日本スタビライゼーション協会, ²順天堂大学)

【目的】本研究では、性差におけるドラウタビリティ・プログラムの有効性を検証した。【方法】調査対象者：都内公立小学校4年生 (N=31名) から、転校や欠席があった児童を除いた19名を対象とした（女子9名、男子10名）。調査期間と頻度：8週間の研究調査期間を設定。ドラウタビリティ・プログラムを4週間実施し、その後1週間間隔で反復横とびと立ち幅とび得点を測定して、得点変化をそれぞれ比較検証した。プログラムは、1週あたり平均2回で合計8回実施。業間中休みの20分間を利用して、1回あたり10分間前後のプログラムを行った。【主な結果と結論】反復横とび得点では、有意な交互作用 ($F(8,136) = 1.47$, ns) は認められなかつたが、プログラム期間 ($F(8,136) = 7.76$, $p < .01$) と性差 ($F(1,17) = 5.57$, $p < .05$) に有意な主効果が認められた。立ち幅とび得点では、有意な交互作用 ($F(8,136) = 1.58$, ns) は認められなく、性差 ($F(1,17) = 1.12$, ns) においても有意差は認められなかつた。プログラム期間 ($F(8,136) = 6.50$, $p < .01$) にのみ有意な主効果が認められた。これらの結果から、反復横とび及び立ち幅とび共にプログラム期間に性差が無く有意に向上了したことから、ドラウタビリティは、性差が無く有効であることが窺えた。また、反復横とびでは、得点において男子が高く性差があり、立ち幅とびでは、得点において性差が無いことが窺えた。

キーワード：性差、反復横とび、立ち幅とび

N2021203

70歳以上高齢者の身体活動と体力との関連について

○松元隆秀¹, 東恩納玲代², 吉田剛一郎³, 永山 寛⁴, 吉武 裕³ (¹鹿屋体育大学大学院生, ²名桜大学, ³鹿屋体育大学, ⁴福岡大学)

【目的】：70歳以上の高齢者を対象に、健康日本21の目標歩数（男性：6700歩、女性：5900歩）達成者と未達成者の割合及び両者の体力と身体活動状況を比較・検討することを目的とした。【方法】：対象者は70歳以上の高齢男性56名 (77 ± 4 歳) と女性117名 (77 ± 5 歳) であった。強度別活動時間と歩数の測定には加速度計を用いた。体力測定項目は、握力、開眼片足立ち、膝伸展力、脚伸展パワー、ステッピング、Timed up and Go Test (TUG)、最大歩行速度及び長座体前屈とした。【結果とまとめ】：1日の歩数は、男性6115歩、女性6336歩であり、女性のみ目標歩数を上回っていた。達成者の割合は、男性、達成者21名 (37.5%)、女性、達成者58名 (49.6%) であった。身体活動と体力を年齢で調整した場合、男女とも達成群は未達成群より、安静時間は有意に短く、平均歩数、低・中等強度活動時間は有意に長かった。また、女性のみ高強度活動時間も有意に長かった。体力では男性では有意な差は認められなかつた。女性では未達成群は達成群に比べて最大歩行速度と開眼片足立ちが有意に劣っていた。以上の結果から、達成者は未達成者より1日の活動時間は長い傾向にあり、体力水準は高かつた。

キーワード：健康日本21、体力、歩数

N2021204

運動リーダーとしての活動が自身と参加者の身体活動、体力、および健康関連QOLに与える影響

○山本直史¹, 浅井英典¹, 萩 裕美子² (¹愛媛大学, ²東海大学)

【目的】本研究では高齢者を対象に運動リーダーを養成し、運動リーダーとしての活動が自身と参加者の身体活動、体力、および健康関連QOLに及ぼす影響を検討することを目的とした。【方法】15名の運動リーダーを養成し、養成された運動リーダーは、3ヵ月間、週1回、1回90分の運動教室において、下肢筋力の向上を目的としたサーキットトレーニングを指導した。教室には46名の者が参加した。これら、運動リーダーと教室参加者の質問紙法による身体活動、体力（握力、椅子立ち上がりテスト、上体起こし、開眼片足立ち、および最大2歩テスト）、および健康関連QOL (SF-36) を測定した。【結果】教室前後において、運動リーダーには、身体活動、体力、および健康関連QOLの全ての項目について有意な向上は認められなかつた。参加者においても、身体活動、体力、および健康関連QOLについては有意な向上は認められなかつた。しかしながら、低体力者（年代別の全国平均値を下回る者）のみを抽出して検討を行った結果、全ての項目において向上の傾向が認められた。【まとめ】運動の専門家ではない運動リーダーのみが指導を行う教室であつても参加者の体力向上効果が得られる可能性が示唆された。

キーワード：運動リーダー、健康度、同世代間交流